

【調査報告】

デンマークの教育・福祉領域における障害者支援の取り組み

池田 法子

Report on the Practice to Support Persons with Disabilities
in the Field of Education and Social Welfare in Denmark

Noriko Ikeda

1. はじめに

本調査報告は、2016 年 9 月 19～29 日に、デンマークの教育福祉領域における障害者支援の現状や課題に関する調査の成果をまとめたものである。具体的には、デンマーク独自の成人教育機関であるフォルケホイスコーレ、子ども・若者が放課後に遊ぶクラブ、障害当事者団体の 3 つの異なる組織・団体にフィールド調査を行い、先進的な福祉施策を展開してきたデンマークにおける近年の動向を明らかにすることを試みた。

デンマークは、北欧に位置する福祉国家である。「高福祉・高負担」という言葉に端的に示されるように、デンマークでは国民が非常に高い割合の税金を負担する反面、医療・教育・福祉のサービスが無償で提供される。例えば、GDP に占める税金の国民負担率は 48.4%(2013 年時点)¹と世界で最も高水準である。また、北欧は他の OECD 諸国と比べて公共セクターが突出して大きい。GDP を高い割合で公共消費に使い、公共セクターで働く者の割合は、日本の約 5%に対し、北欧では約 30%を占める²。これらの公共セクターの運営は、中央集権型ではなく、地方自治を基礎とする点も特徴である。

デンマークの教育制度を概観すると、義務教育は 7 歳から始まり、9 年間の小中一貫教育である。ただし、就学義務ではなく、しかるべき教育内容が提供されるならば家庭学習も認められている。約 12%の児童・生徒が独立学校(フリースコーレおよび私立学校)に就学し、多様な教育を選択することが可能である³。デンマークの教育では、教育の内容を選択・決定するのは市民であるという伝統があり、それが公教育にも影響を与えてきた。

こうした多様性を重視する教育の伝統は、19 世紀以後の民衆教育の歴史の中で形作られてきた。本調査の訪問先の一つであるフォルケホイスコーレは、牧師・教育者のグルントヴィ(1783-1872)⁴が展開した、貧困に苦しむ農民のための自立と対話を重視する教育運動をルーツに持つ。デンマーク独自の教育を象徴するものの一つといえよう。

では、デンマークでは、教育・福祉の領域において、どのような障害者支援の取り組みが展開されているのだろうか。本調査では、公教育に限定するのではなく、複数の組織・団体を訪問することで、デンマークの生活に密着した多様な実践を立体的に明らかにすることを意図している。以下、冒頭に述べた各組織・団体について、①訪問先概要、②施設

の様子、③聞き取り調査から得た知見、の3点から整理し、最後に総括として考察をした
い。

〈デンマークの基本情報〉⁵

	デンマーク	日本
人口	570 万人	1 億 2697 万人
国土面積	4.3 万km ²	33 万km ²
平均寿命（男性）	78.6 歳	80.79 歳
平均寿命（女性）	82.5 歳	87.05 歳

2. インタビュー対象者一覧

(1) ノーフュンス・ホイスコーレ

百代立枝ヨーゲンセン氏（短期研修コース代表者）

山本勇輝氏（同スタッフ）

(2) Lavuk

Jacob Khan 氏（スタッフ）

(3) DPOD (Disabled People's Organization Denmark)

Teis Piel Christensen 氏（Programme Coordinator / Adviser）

3. 訪問先概要と調査から得られた知見

3-1. ノーフュンス・ホイスコーレ

(1) 訪問先概要

ノーフュンスホイスコーレは、フュン島北部の **Bogense** という小さな町に位置するフォルケホイスコーレである。フォルケホイスコーレとは、デンマーク独自の全寮制の成人教育機関である。先に述べた通り、フォルケホイスコーレの起源は、19 世紀にかけて活躍した教育者であり牧師、詩人、政治家でもあったグルントヴィに遡る。グルントヴィは、真理は聖書の中ではなく教会に集まる会衆の中に「生きた言葉」としてあると考え、農民たちが自らの言葉で学ぶ学校としてフォルケホイスコーレを立ち上げた。

現在、フォルケホイスコーレは、17.5 歳以上であれば誰でも入学することができ、数ヶ月から最大3 年間まで在籍することができる。学べる主要科目は学校ごとに特色があり、さらに文化的・創作的科目が選択授業として取り入れられている。入学時や学期末にテストはない。全生徒が寮に寄宿して共同生



活を送り、授業外でもインフォーマルに学ぶ環境があることが特色の一つである。

ノーフェンス・ホイスコーレには、5 つのコースがある。具体的には、①インターナショナルクラス(各国から留学生を受け入れるコース)、②デンマーク語・文化コース(難民・移民に対してデンマークの言語や文化の学習支援を行うコース)、③ジェネラルクラス(デンマーク人の若者を対象に教育支援を行うコース)、④ライフコース(知的障害のある学生を受け入れるコース)、⑤スリムコース(肥満気味の人が入学し、自分のライフスタイルをチェンジするコース)の 5 つである。これに加えて、短期研修コースがインターナショナルクラスに所属しながら同時進行で実施される。生徒数は、全体で 80 名弱である。



ノーフェンス・ホイスコーレの特色の一つは、日本人スタッフの存在と日本人留学生の積極的な受け入れである。その理由は、同校がもともとデンマークに移住した日本人によって 1983 年に設立された、不登校生徒施設と日欧文化交流学院を併設した施設であったためである。同校は 2005 年にフォルケホイスコーレの認可を受けた。現在、マネジメントに二人の日本人スタッフがおり、筆者はその二人にお話を伺った。

(2) 施設の様子

ノーフェンス・ホイスコーレは、アンデルセンの生誕地として知られる Odense から車で 30 分ほどに位置し、牧草地に囲まれた広大な敷地を持つ。日用品関係は、Bogense という小さな隣町で揃えることができる。敷地内には、全員が同じ場所で食事をとるスペース、教室、寮に加え、ガーデニング、サッカー場、カフェ、プレイルーム、工芸品などの製作所、自分たちで作ったサウナもある。寮は、短期研修者用、一般学生の部屋、知的障害のある学生の寮、の 3 つに分かれている。敷地内には先生が二人以上住む規定になっており、校長ともう一人の先生が住んでいる。

筆者が訪問した日は選択授業の日であり、ガーデニング作業とベンチ製作の 2 つのグループに分かれて生徒たちが作業を行っていた。両グループの人種・国籍・年齢は多様であり、知的障害のある学生とともに作業をしていた。昼食の時間になると、野菜・肉・パスタ・パンといった種類が豊富なビュッフェ形式で、学生たちは好きな量の食事を取っていた。

(3) インタビュー調査から得た知見

①「多様性(diversity)」の重視

ノーフェンス・ホイスコーレでは、「多様性(diversity)」を非常に大事にしており、ここでしか出会えないような人との出会い、共同生活を送ることに価値を置いているという。例えば、国籍に関しては、同校には日本人のみならず様々な国から学生が来ている。近年では移民・難民を多く受け入れているという。若者支援として、デンマークの義務教育からドロップアウトしたような若者たちに対して、オルタナティブな教育機会を提供するという役割も同校は担う。さらに、知的障害のある学生を受け入れるコースを置いている点

も、同校の特徴の一つである。こうした多様な学生がいる中で、相手の名前を呼ぶことが第一歩であるという。

②知的障害のある学生への教育

知的障害のある学生を受け入れるライフコースは、食生活のコースと音楽・文化活動のコースの2つに分かれている。まず、知的障害のある学生が入学を希望した際には、面接を行い「学びのポテンシャル」があるかどうかを判断する。「学びのポテンシャル」とは、自立して生活ができること、全体に向けての情報をキャッチできることの2つであるという。フォルケには2名の支援スタッフがいるが、生活のすべてのケアを行う訳ではないので、上記を最低限求められる条件としている。入学を希望する学生は、普段は地域の作業所や授産所、デイケア施設で生活をしているが、生活に変化をもたせたいと思う時、フォルケに入ることができる。何度でも入学可能で、何度も来ているというある男性は58歳ということだった。

③フォルケの伝統的な学び -日本人学生への学習支援から

ノーフェュンス・ホイスコーレでは日本人留学生を積極的に受け入れている。日本から来る学生は、「福祉国家デンマーク」のイメージを持って福祉に関心を抱いてくる場合が多いという。だが、ここに来た学生は、まずは自分の中にある「福祉」とはどのようなものなのかを問い直すことから、「福祉」についての学びが始まる。すなわち、システムや政策といったハード面のみならず、福祉国家を支えている文化や国民のあり方について、全寮制学校で共同生活をしながら体験的に学ぶ。実際に、デンマークでは、「福祉」という言葉よりも「生活」という言葉をよく使うという。教員は学生と対話をし、学生は考えたことをノートに記録していく。書いて記録することで、自分の考えも整理されるし、変化がわかるようになる。

日本に帰国した卒業生から連絡が来ることもある。帰国して3年が経った人から、「12週の滞在中は、自分がフォルケで何を学んだのかに対して答えは出なかったが、今になってわかるものがある」というメールが来たこともあり、こうした連絡をもらうのは嬉しいことだという。この自己の「福祉」観の省察などを含む学生の学びは、フォルケホイスコーレの歴史なくしては語れない部分があるという。すなわち、「グルントヴィが築いた、民衆が同じ釜の飯を食って夜に語り合う生きた時間を通して、自分たちの学びを作っていくという文化」が基礎になっている。したがって、フォルケホイスコーレでの学びとは、言葉では説明しきれない、体験しないとわからないものであるという。

④デンマーク教育政策におけるフォルケの位置付けの変化

19世紀に設立されたフォルケホイスコーレの伝統的な学びが実践される一方で、デンマーク教育政策におけるフォルケホイスコーレの位置付けは変化も見られるようである。

第一に、学校数の減少である。以前は、デンマーク全土に178校ほどあったというが、現在では70校程度に減少した。だが、その一方で、フォルケホイスコーレの中等教育版であるエフタースコーレの人気は高まっているという。

第二に、2013年からフォルケホイスコーレがデンマークの特別なニーズのある青少年に

対する教育ラインの中に位置付けられた点である。この制度においては、その子にとって最も意味のある青少年教育を選択する権利を保障することが国の義務であり、フォルケ・ホイスコーレが最も適していると判断された場合、国が補助金を出してその教育を支援する。

第三に、移民・難民の増加に伴い、地方自治体との協力体制で統合政策にも参加している。移民・難民の統合において、デンマーク語の習得が重要事項となる。ノーフェンス・ホイスコーレでは、週 3 回、地域のデンマーク語の先生が来て語学を教えているという。

3-2. LAVUK

(1) 訪問先概要

Lavuk は、障害のある子ども・若者たちが放課後に遊ぶ場所・機会を提供することを目的とするクラブである。コペンハーゲン市全域の障害のある子ども・若者たちが集まる。デンマークでは学校が午後 1～2 時くらいに終わり、バスが学校を周遊して子どもたちを連れてきて、終わると家まで送迎する。利用者の年齢は 12～25 歳ほどで、全利用者数は約 180 名である。

子ども・若者たちが遊ぶ活動の内容は、スポーツやアート活動、ゲーム、おしゃべり、料理、リラクゼーションなど多岐にわたる。アクティビティは、曜日によって異なる。年に一度、1 月にフランスへスキー旅行にも行く。彼らは、個々の機能面と好みに合わせて、自分が遊ぶ内容を決める。

利用者の障害の種別による条件はない。Lavuk のルールは暴力をしないこと、逃げ出さないことの 2 点である。Lavuk の運営は、デンマークの教育予算でまかなわれており、親が料金を支払うことはない。

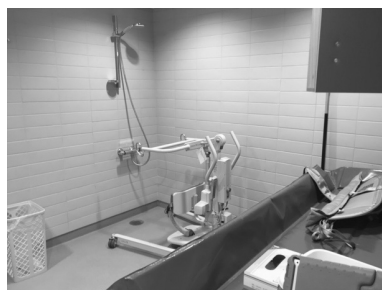
(2) 施設の様子

Lavuk は、コペンハーゲン中央駅から電車で 10 分の Svanmollen 駅から徒歩 15 分ほどの位置にあり、大きな公園と隣接している。建物の中には、アート活動や料理、ゲームといった用途別の部屋や大ホール等がある。また、多様なインペアメントに対応する配慮がされている。例えば、立つことを支える機器やシャワーが併設されているトイレや、リラックスできるように皮膚に刺激を与える椅子が設置されているリラクゼーションルームが挙げられる。屋外には、キャンプファイヤーをする場所、遊具がある。徒歩数分の場所にある運動場は、近所の学校と共有して利用している。運動場の奥にある自転車小屋には中古自転車があり、週 2 回開催される自転車のワークショップで使用する。

筆者が訪問した金曜日は、施設内でイベントが行われる日である。大ホールでは音楽のイベントが行われていた。スタッフによる司会進行で、前に子どもが一人ずつ座ってヘッドホンをつけ、



流れている音楽を歌う。その歌を聞いて、子どもたちが曲の名前を当てるというゲームである。マイクやレコードの設備は非常に充実しており、カラフルな照明が室内をくるくると照らす。他の部屋では、それぞれの部屋で子どもたちが自分のやりたい活動を選択し楽しんでいる様子だった。



（３）インタビュー調査から得た知見

①支援スタッフの特徴

スタッフの数は全部で 30 名程度である。ボランティアはいるが、数は少ない。スタッフの中にはソーシャルワーカーが 2 名おり、医療の専門スタッフはいない。親からの Lavuk に対する評価について尋ねると、親との連絡ノートによって意思疎通は取るが、親が直接 Lavuk に来ることはほとんどなく、スタッフも親のことについてはあまり知らないという。Lavuk に子どもを預けられることで、親が自分の仕事をする助けとなる側面もあるという。

Lavuk のスタッフは、継続勤務年数が長いことが特徴の一つである。デンマークでは、3～4 年で仕事を変えるのが一般的だが、Lavuk では 10 年以上働いているスタッフも多い。インタビューを行った Jacob 氏も、働き始めて 10 年程が経つという。彼は、以前は一般のサッカークラブで働いていたが、インターン参加を契機に Lavuk で仕事を始めた。子どもの遊びが上手くいくようにマネジメントする際、普通よりも色々なことが起きるので、ここでの仕事を続けているという。「毎日ちがうことが起きる」と Jacob 氏は言う。子どもは最大 10 年程 Lavuk を利用するので、その成長の様子を見るのも面白いという。

②合理的運営とコスト削減

訪問調査から、合理的に運営しコスト削減している点が窺えた。施設のバリアフリー化や器具が充実している一方で、コペンハーゲン市全域の障害のある子どもたちを 1 箇所に集めることで、コスト削減になる。さらに、近所の学校との運動場の共有や、中古自転車のリサイクル使用など、持続可能で合理的運営が実施されていると感じた。

③現在の取り組みの経緯

Lavuk は数十年前にできたが、設立当初は普通の子どもも一緒に遊ぶ場所だった。障害のある子どもだけを対象とするようになった理由は、一緒にするとドラッグやアルコールといった面で悪影響があったためという。放課後に自分で好きなように遊ぶことが困難な状況にある子どもたちを集めて遊ぶ機会を提供することが目的であり、健常児と障害のある子が Lavuk で一緒に遊ぶといったことはほとんどないそうだ。

3-3. デンマーク障害者団体 (DPOD : Disabled People' s Organization Denmark)

（１）訪問先概要

DPOD はデンマークの全国規模の障害者団体であり、33 の部局から成る。各部局は、視覚障害や聴覚障害などの障害種別の団体やユース団体等によって構成され、個々の部局の下に地方自治体規模の部局がある。したがって、全体の人数や組織内の障害者の割合は正確には不明であるが、「DPOD は For them でもあるが By them でもある」と強調された。DPOD は、各団体が連帯してデンマーク全体の障害者団体として機能する場合もあるが、個々の団体の発言力を強めるために代表させて DPOD という名前を出すこともある。



(2) 施設の様子

DPOD の事務所は、「世界で最もアクセシブルでインクルーシブな建物」として建設され、2012 年にオープンした。本事務所は、国際的に障害者の人権に関する問題に取り組む Zero Project の「アクセシビリティに関する 2014 年度の革新的実践」の一つである⁶。ここで重要なのは、この建物はある特定の障害種別に対応するのではなく、あらゆるインペアメントに対してバリアフリーとなるよう設計されている点である。建物は部局ごとに分かれた 4 つのウィングによって構成される。建物内部は部局ごとに色を分けることにより、視覚的にも一目でわかる構造となっている。さらに、車椅子の人が使用しやすい高さの机、点字ブロック、オートメーション機能・足で蹴るボタンが付いたエレベーター等が整備されている。地下にはジムがあるという。



(3) インタビュー調査から得た知見

①デンマークの学校におけるインクルーシブ教育の動向

2012 年に、デンマーク政府はより普通教育システムの中で教育を行うインクルーシブな学校を目指していく方針を明確に示した。その背景として、財務省や教育省によって実施された調査によれば、特別支援教育へかかる支出が増大しており、教育への公的支出のうち約 30% を占めていた。同調査では、特別支援教育にかかる支出の増大の主な要因は、特別支援学級および特別支援学校への生徒の移行にあることが明らかとなった。そこで政府は、特別支援教育へ移る生徒数を全生徒のうち 4% に減らすという目標を定めた⁷。そのために行政は非常に急速に施策を実行し、まず物理的に生徒たちを普通学校に移すということから始めたという。この結果、一部で具合が悪くなったり学校に行けなくなったりした子どもたちがいた。また、サポートが行き渡らず、教員側も十分な適性を持っておらず十分に対応できないと言った事態が生じた。こうした状況の中で、6~16 歳くらいの生徒たちによるアソシエーションが行政に対して働きかけたため、DPOD は彼らと声を合わせた。その結果、政府は引き続きインクルーシブ教育を目指していくが、数値目標を廃棄したという。

Teis 氏は以下のように述べている。インクルーシブ教育はもちろん目指していくべき方向であるが、適切な方法によってなされる必要があり、「インクルージョンとは何か」を考えていく必要がある。また、教育とは予算によって決定されるのではなく、生徒たちの「Wellness」を第一にするものでなければならない、その実現は複雑な道のりとなるかもしれない、と。

親たちの反応としては、インクルージョンを推進する考えのひとと、インクルージョンによって教員たちが障害のある子のサポートに回ってしまっただけで教育が崩壊してしまうと考える層がいたという。

高等教育に関して言えば、現状では多くの生徒が高等教育を受けることができている訳ではないという。その背景には、ジェンダー、文化的背景、親の経済状況等が反映される。現在想定されているのは、普通教育を受ける子どもの数を増やすことで、高等教育を受ける人数も増やしていくというものである。

②DPOD の国際協力

インタビュー対象者の Teis 氏の仕事は国際協力で、ルワンダがフィールドである。ルワンダでは、もともと基礎教育の整備が強く推進されてきた。現在、学校の状況は大きく改善されたが、障害のある子どもへの教育には課題が残されており、約 80%の障害のある子どもが義務教育を修了していないという⁸。そこで、DPOD が、ユニセフとルワンダの障害者団体である NUDOR(The National Union of the Disability Organizations of Rwanda)と連携し、インクルーシブ教育をモデルに支援を行っている。プロジェクトは主に、教員養成と市民の意識(awareness)向上に焦点を当てている。市民の意識を向上すると同時に、地域のネットワーク作りを目指しているという。

1994 年に DPOD が設立された当初は、チャリティとしての要素が強かったという。20 年程前から、より当事者の声を反映させるという動きが高まると同時に、国際活動も始まった。提携している国は他にウガンダ、ネパールなどの 4 カ国であり、教育事業をメインに実施している。

4. おわりに

以上、本稿では、デンマークの教育福祉領域における障害者支援の取り組みに関する調査内容を報告してきた。3つのフィールド調査を総括して、考察と今後の展望を述べる。

第一に、デンマーク(北欧)における「インテグレーション・インクルージョン」概念についてである。調査を通して、それぞれのフィールドにおいて障害の種別、さらには人種や国籍といった多様な背景を超えて共生を目指していく姿勢が感じられた。その第一歩が、「相手の名前を呼ぶ」点にあることは、非常に印象的であった。その反面で、デンマーク国内における難民・移民の統合政策がますます重要度を増している点も感じられた。今後、デンマークにおける「インテグレーション・インクルージョン」概念が用いられる文脈、政策や実践における位置付けをさらに検討していく必要があるだろう⁹。

障害のある児童・生徒の教育に焦点を当てれば、政府の打ち出すインクルーシブ教育の方針と学校現場の間で様々な葛藤が生じていることが明らかとなった。教育財政や政策転

換といった課題に直面する中で、生徒の「Wellness」を実現するインクルーシブな教育環境の追求がさらなる課題であると考えている。

第二に、施設の設備・空間デザインの充実である。訪問した施設には、広々とした空間に明るい配色が施されていた。生活・労働・余暇活動を行う場所として、利用者の使いやすさが前提とされるのは、大いに示唆に富む点であろう。

第三に、アソシエーションの機能である。DPOD への聞き取りから、様々な規模のアソシエーションが活発に機能し、必要であればアソシエーション同士が柔軟に連帯している様子が窺えた。障害者団体に限らず、国内の教職員組合や労働団体、その他の様々なアソシエーションに関しても同様である。市民の自己決定を尊重する基盤に、人々の緩やかなつながりがあるように思われる。こうした市民活動が行われてきた背景や今後の課題・展望についても、より掘り下げて考察してみたい。

〈謝辞〉

本調査に快くご協力いただきました皆さまに、心より感謝を申し上げます。

また、本調査は京都大学の助成金「平成 28 年度 教育学・心理学分野におけるデンマーク王国の大学との学際的連携プログラム」をいただき実施しました。このような機会をいただき、誠にありがとうございました。

〈訪問団体 URL〉

ノーフェュンス・ホイスコーレ

<http://nordfyns.nu/ja/om-skolen>

<http://ifas.renuplus.com/nordfyns/>

LUVAK

<http://lavuk.org>

DPOD

<http://international.handicap.dk>

〈参考文献一覧〉

石田祥代「北欧におけるインテグレーション(インクルージョン)の成立と展開」中村満紀男・荒川智編著『障害児教育の歴史』明石書店、2003、pp.170-174.

クリステン・コル著、清水満編訳『コルの「子どもの学校論」:デンマークのオルタナティブ教育の創始者』新評論、2007.

清水満『生のための学校:デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』新評論、1996.

鈴木優美『デンマークの光と影 ー福祉社会とネオリベラリズム』老生舎、2010.

永田佳之『オルタナティブ教育 ー国際比較に見る 21 世紀の学校づくり』新評論、

¹ 財務省 (国民負担率(対国民所得比)の国際比較(OECD 加盟 33 カ国)
http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/condition/238.htm (最終閲覧:2017/02/14)

² 鈴木優美『デンマークの光と影 ―福祉社会とネオリベラリズム』壺生舎、2010 年、p.209.

³ 永田佳之『オルタナティブ教育 ―国際比較に見る 21 世紀の学校づくり』新評論、2005 年、p.158.

⁴ グレントヴィとフォルケホイスコーレについては、清水満『生のための学校：デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』（新評論、1996）、クリステン・コル『コルの「子どもの学校論」：デンマークのオルタナティブ教育の創始者』（新評論、2007）に詳しい。

⁵ 出典：総務省統計局(2016 年) <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.htm>

デンマーク統計局(Statistics Denmark, 2016)

<https://www.dst.dk/en/Statistik/emner/befolkning-og-befolkningsfremskrivning>

厚生労働省(平成 27 年簡易生命表の概況、平均寿命の国際比較)。

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life15/dl/life15-04.pdf> (最終閲覧:2017/02/14)

⁶ Zero-Project は、障害者の人権に関する国連会議からの主題について毎年調査を行い、その年の主題について最も革新的な政策・実践を選んでいる。

<https://zeroproject.org/about-us/> (最終閲覧:2017/02/14)

⁷ European Agency for Special Needs and Inclusive Education, Denmark -Overview

<https://www.european-agency.org/country-information/denmark/national-overview/complete-national-overview> (最終閲覧:2017/02/14)

⁸ 資料「Education for all –Project brief」(A collaboration between: Danish Scout Aid, the Disabled Peoples Organizations Denmark and the National Union Of Disabilities' Organizations Of Rwanda)より。

⁹ 北欧では、1970 年代に「ノーマライゼーションを具現化する手段」としてインテグレーション概念が理解されてきたが、1990 年代に入るとインクルージョンの理念が国際的に広まった。北欧諸国の間でこれらの概念の歴史的展開にいかなる差異があるかは十分に解明されていないと指摘されている。(石田祥代「北欧におけるインテグレーション(インクルージョン)の成立と展開」中村満紀男・荒川智『障害児教育の歴史』明石書店、2003 年、pp.170-174.)